

初期パーリ佛典に見える「疑」の語について

桜 部 建

この小論は、昭和四十年真宗同学会において発表し、その概要が大谷学報第54巻第4号59—60ページに載せられたのを、補訂したものである。

一

初期パーリ佛典の中で「疑」の意味に用いられている語は種々である。

- (1) *vicikiccha* はもろもろのテキストを通じて頻出する。PTSの辞典 (s. v. *vicikicchati*) では接頭字 *vi-* を否定の意にとり 'dis-reflection' と解している。おそらへブッダモーサの *vigata cīkiccha ti vicikicchā* などう釈 (Vism 471) に拠っているのであろう。しかしその *cīkiccha* (= *tīkicchā*) は「省慮」よりもむしろ「治癒」の意 (cf. Sn 927, s. i. 222; 水野『心識論』五八九ページ) に取るべきであろうし、その積自体 *etymology* として拠るべきほどのものではあるまい。多分この語は、原義「識別しようと欲する」(*vi/cit* の *desiderative*) から、「ちまたちまたに考えようとする」「思い惑う」「疑惑する」の意となったものと考えてよいであろう。

(2) 語根 $\sqrt{\text{sañk}}$ は「案じ懼れる」「懸念する」「疑懼する」の意が強い。その $\sqrt{\text{sañkati}}$ は bhayati (怖れる) と並べて用いられる (S i 111)。名詞 *sañka* は現われること極めて稀 (J vi 158 など) である。〔合成語 *sañkhasvara*

が「訝しむ」あるいは「訝しむをいふことながらの」の意で形容詞として用いられている例はかなり広く見出せる (Vin ii 236; S iv 180=A ii 239, iv 128, etc.; S i 49=Dh 312=Thag 277; S i 66) が、この語を「*サマナーサ*の語で (DhA iii 485, PugGA 207) *サマナーサ* *sañka* *サ* *sara* とからの合成語と見るのは将やうく正しくなく (PTS Dic, s. v. *sañkhasvara*)」。*Mvy* 9140 (に見える *sañkhasvara* なる語形がこの語と関連していることは疑いなくからうである (Edgerton Dic, s. v. *śaṅkhasvara-samācāra*)」接頭字のついで *asañkati* (Ud 44, M iii 7, J iv 386, etc.) & *parisañkati* (J iii 210, etc.) も時々見られる。これらは共に「怪しむ」「疑いをかける」というニュアンスが強い。名詞 *asañka* は多く合成語の中に見える (Dhedasankin, Sn 255; *sasañka*, Thig 343; S iv 175; *niraśaṅka*, J i 264)。 *parisañka* (Vin iv 314; D iii 218, etc.) *parisañkita* (Vin ii 243, A iii 128, etc.) なども現われるが用例はそれほど多くない。時に *ussañkin* という形も「疑懼する」という意の形容詞として用いられている (Ud 19, Vin i 347, etc.)。

(3) *kañkha* は奇妙な語である。語根 $\sqrt{\text{kañk}}$ は一般には「望む」「欲する」「……であらうと期待する」の意に用いられ、「疑う」の意味で使われることは無さうである。ところが佛典においては、稀に「欲する」の意に用いられることもあるが、「疑う」の意味で用いられることが断然多い。いま、初期のパーリ佛典の中でも、*kañkha* はかなり頻出するが、ほとんどの場合「疑」の意であって「欲求」「期待」の意味に用いられる場合は僅か (例えば *ya kañci kañkhā abhinandanā vā...so ham akañkho apiho anupayo*, S i 181. SA 457) の *kañkha* を *tanhā* と解する) どうか過激な。その *kañkha* *kañkhati* (死) 時の至るを待つ) というイデオムは韻文のテキストの中に何度か現われる (It p. 69; Thag 12, 1218; Sn 516; S i 65, 187)。また接頭字 *pañ-* が附けられる「望む」「欲求する」の意である (*pañ-* *kañkhati*, S i 227; *pañkañkhā*, A ii 185; *pañkañkhin*, M i 121; *pañkañkha*, Sn p. 140 (= *icchitabba*, Sna); A iv 17, S i

88, v 225; pāṭikānkhin, D i 4, M ii 33, etc.) ㄱ' abhi- が附いた場合も同様である (abhiṅkhaṅkhaṭi, Sn 510)。kaṅkha の語が「疑」の義をもつようになるのは、あるいは、「はつきり知っていないことをはつきり知ろうと」欲する」という意から出たのかも知れない (cf. pucchami kaṅkhi akaṅkhiṇ para-vediyesu, D ii 241; kaṅkhi vecchicchi agaman paṇhe pucchitun abhiṅkhamāno, Sn 510) と思われるけれども、なお審かでない。

(4) vimati は、名詞としてのこの語形以外には、稀に過去受動分詞 vimata が見られるのみで、動詞形 vimānhati は全く現われないようである。したがって vimati は、vi/man より生じた名詞形と見るよりも、むしろ名詞 mati に接頭字 vi- を附したものと見るべく、その場合も、「mati (=mind, opinion, understanding) を離れた」の意と解するよりも「種々な mati ある」の意と解すべきであり、さまざまに思い惑って考えが一つに決まらぬ状態を vi-mati というのである。

(5) kaṭhamkatha は文字通りには、'saying how' であるから、思い迷って「どうしようか」「どうなんだろうか」と言うのみで明確に事を判断できぬ状態を意味すること明らかである。

(6) saṅsaya の用例は、わずかに chinnsaṅsaya (Sn 1112, A ii 24) ʼasaṅsaya (M i 386) などの合成語として現われるほかはきわめて稀 (Sn 682 に見るくらい) である。

二

このように色々の語が用いられ、それらはそれぞれのニュアンスをもっているわけであるが、実際の用例の上では、(2)を除けば他は、各語のニュアンスによって用いられる方が異っているというよりも、おのおのがあまり殊別無しにいずれもほとんど同義語として通用されているといつてよく、それらの中のいずれか二語を並べ挙げている場合も沢山あるし、二つの語を結合して合成語としてしている場合もあるのである。

れていることから知られ、北伝阿毘達磨・大乘論書の中の解釈（水野『心識論』五八八―五九二ページ参照）やチベット訳語（e. g. *kāṃkṣā* = *soṃ hi*, *vimati* = *vid gñis*）などからも知られる。

ただ、煩惱法としてのあるいは心所法としての「疑」は、常に *vicikicchā* であって、けっしてそれ以外の語は用いられない。

それは有身見 (*sakkāyaditthi*) ・戒禁取 (*śīlabbataparāmāsa*) と共に三結 (*saṃyojanāni*) の一であり (M i 9, D iii 216, etc.)、有身見・戒禁取・欲貪 (*kāmarāga* もるゝは *kāmacchanda*) ・瞋 (*vyāpāda*) と共に五下分結 (*pañc'orambhāgiyāni saṃyojanāni*) の一であり (M i 432, D iii 234) 欲貪 (*kāmacchanda*) ・瞋 (*vyāpāda*) ・憍沈睡眠 (*thīna-middha*) ・掉举惡作 (*uddhacca-kukkucca*) と共に五支 (*aṅgāni*, S i 99, M i 294) もるゝは五蓋 (*nivaraṇāni*, 類出) の一であり、欲貪 (*kāmarāga*) ・瞋 (*patigha*) ・見 (*ditthi*) ・慢 (*māna*) ・有貪 (*bhavarāga*) ・無明 (*avijjā*) と共に七隨眠 (*anusayā*, D iii 254) の一であり、あるゝは七結 (*saṃyojanāni*) の一である (この場合は第一項は愛 *annanaya*, D iii 254 であり、または貪 *rāga*, M i 100 である)。あるゝはまた十一の心の隨煩惱 (*cittassa upakkilesā*, M iii 156-61) の一とされることもある。

III

疑の対象となるのは、時には「如来」(D iii 116, S v 161) であり、時には如来の「正法」(A ii 174) であり、時には「師 (佛) と法と学処」(D iii 238, M i 101) であり、時には「佛・法・僧・〔八正〕道 (*maggā*) ・〔中〕道 (*patipaddā*)」(D ii 154, A ii 79) である。あるゝはまた「過去世・未来世・現在世」が (D iii 217) 、「また時には隱馬藏・広長舌の「二つの大人相」が (D i 106, M ii 135, Sn p. 107) 疑惑の対象となる。「一切の善法」に対して疑惑がもたれる (M i 386, iii 35; D iii 49) こともある。総じて「疑いを生ずべき種々様々な法」(*anekavhiṭṭā kanhāṭṭhāniyā dha-*

mmā, A iii 361, v 16) があるのである。

そつした疑は「越え渡 (tarati, Sn 540; vitarati, Ud 1, 2)」「断た (vihanati, Aiii 248)」「断ぜ (vinayati, Thag 3, 131; Sn 559)」「断る (pativodeti, A iv 152, v 16)」「断る (chijjati, Thag 75, Sn 87)」等の語である。

法を知り (pañānati) 法を知る (vedeti) などによって疑は消え去る (vappayati) し (Ud 1, 2) 義 (attha) を知る (aññati) などによって (Sn 58) あるは理を説き明かす (vyākharoti, Sn 1025) などによって疑は制せ (vinayati) される。正慧 (sammappaññā) によって見る者は疑を捨てる (A i 260)。疑が断せられる時は覚知 (buddhi) が増す (Thag 75)。疑無き者は不動 (aneja, Sn 87, 477) であり、心の荒蕪が無 (akhiṇa, Sn 477)。疑を棄てて人は心を淨める (cittam parisodheti, D iii 49)。

「疑 (kaṅkhati, vicikicchati)」の *antonym* は saddahati (Si ii 84), adhimuccati, sampasīdati (D i 106, A iii 248, Sn p. 107, etc.) などであり、いずれも「信する」と訳される語であるが、「疑」の内容が右に述べたとききものであるから、それに対する「信」の内容も、正しい覚知を得ることによってあれこれと思い惑うことのなくなった状態、心の動揺やおそれがなくなりものごとを確信をもって了解するに至った状態、にほかならないと考えられる。このように考えることはまた「信解」「勝解」などと漢訳されている adhimuccati; adhimutti, adhimokkha の用例や語義の検討からも支証を得られると思うけれども、それについては別の機会を得たい。